民間感覚を常に意識

コロナ禍はスピード勝負

「市民が真ん中」の市政を現場に足運び汗をかく

↘ 徹底的に市民の声を聴く市政を掲げています。1年が過ぎた徳永市長の取組みや事業計画などについてインタビューしました。

昨年2月に就任した徳永繁樹市長。新型コロナの感染拡大による生活や経済への影響、人口減少、少子高齢化など様々な厳しい課題のある中、徳永市長は「市民が真ん中」の実現のため↗

徳永 繁樹 市長

平成15年、愛媛県議会議員選挙に立候補し初当選以来、5選。令和2年12月、県議を辞職。令和3年2月に行われた今治市長選挙で初当選。野球少年でポジションはピッチャー。スポーツ全般、観戦も趣味。

広報と傾聴に力注ぐ

イベント追い風に新しい光を

記者・竹葉

まず市長に就任以来掲げてきた「市民が真ん中」について教えてください。

市長・徳永繁樹

誰のための政治なのか、誰のためのサービスなのか。市民に必要なことは何か常に問い続けました。人口減少、過疎化など問題は山積みですが、市民の役に立つ市役所を実現するために掲げたのが「市民が真ん中」の市政です。市民を向いた市政実現のため、質の高いサービスを提供していきます。あらゆる相談に、各課や各種団体と連携しワンストップで対応する「市民が真ん中相談センター」を開設し、心理カウンセラーによる心の悩み相談や法律無料相談の休日開催、オンライン相談なども開始しました。

▲四国初開催となる自転車競技レースも10月に開催

▼今治港開港100周年のイベントで、航空自衛隊「ブルーインパルス」の飛行が決定

記者

新型コロナで状況が刻一刻と変わる中、スピード感のある対応を感じます。

市長

世の中や価値観が激変する現在、スピード感をもった対応が重要です。私もじっとはできず、朝7時過ぎに登庁することもありました。1日で世界の状況が変わり、情報を得られるメディアも多様なため、民間のように即対応する力が行政には求められます。市の情報もSNSなどあらゆる手段を駆使し、他国とのパイプもつながっていきます。

記者

民間企業の経営者のような感覚ですね。

市長

自分たちが何をして、どう動くかです。特に役所はセクト主義で、縦割りで対応しがちです。それでは解決すべき課題に対応できない。そこで若い職員を中心に庁内を横断する17のプロジェクトチームを発足しました。民間の感覚を忘れず、市民の声を聞き強い組織を目指していきます。

記者

今年はイベント開催も増えているようですが、コロナでまだ市全体に以前の活気は戻っていません。

市長

長引くコロナ禍で、大変厳しい社会情勢です。市内の観光地や飲食店も感染防止対策をしっかりと継続しながら、ウィズコロナの明るい未来に向けて力強く舵を切り、市民一丸となって、この荒波を乗り越えていきたい。今年は3年ぶりの開催となる「おんまく」、10月には今治港開港100周年記念事業や「サイクリングしまなみ2022」と事業が目白押しです。こうしたイベントを追い風にし、新しい未来の光を作り出していきたいと思っています。市民の皆さん、今治の街を一緒に良くしていきましょう！

↘2年に比べ1・7倍の1597人が今治に来てくれました。魅力ある街づくりを掲げ、移住者支援にも力を入れてきましたが、移住者からは「住んでみると疎外感がある」という声も聞こえてきます。移住者に限らず、まだまだ市民の暮らしを直視できていないのではないか。その点については、様々なご意見やご提言をいただく中で、キャッチボールを重ねて議論を深め、皆さんと共に選択し、納得と共感のもと新たな道を切り拓いてまいります。

記者

移住者に疎外感があることなど、現場をまわって話さないと気付かないことですよね。よくご存じですね。

市長

現場は県内だけではなく、コロナが鎮静化すれば、例えば東京の霞が関などにも今治市のPRが必要です。頻繁に足を運ぶよう職員に伝えています。キーパーソンに会えない場合でも名刺一枚を置いていこいと。泥臭く足を動かすことで、の自治体より早く市民に伝えることを意識しました。ラジオやテレビを活用した広報プロモーションにも取組み、発信力を強化しています。ワクチン接種は今治市医師会ならびに医療従事者と連携し、また給付金の手続きもできるだけ簡素化するなど早急に対応しました。

記者

忙しい業務の中、市内のイベントなど現場に足を運んでいますよね。

市長

現場に行かないと、市民が本当に何を必要としているのか分からないことも多いです。

記者

そうですね。最近マイタウンでも移住者の記事を掲載しました。私たちも取材して様々なところに行きます。

市長

大三島に移住した方ですね。移住者は年々増え、令和3年は令和↖